

## エル・サルバドル (2)

ベリー・ファリーナさん

### 努力のたまもの

エル・サルバドルに住んで1年が過ぎました。

外交官の妻たちは、夫の赴任地で、ボランティアとして慈善事業を遂行することはできますが、報酬を得る仕事は禁じられています。こうした中、多くの外交官の妻や夫が非営利団体である「外交官配偶者慈善の会」(ABCD = Asociación Benéfica de Conyuges de Diplomáticos) に集まっており、日本人外交官の妻である私もABCDに入会しました。そして、ちょうど私が入会した時、首都サンサルバドルの中心部から離れたテナシンゴという地区の住民たちのために、小さな診療所を建設する話がもちあがりました。

テナシンゴ地区は、エル・サルバドルが内戦下にあった時、特に戦火が激しかった所で、国の東部に位置します。首都サンサルバドルからそこへ着くまでには、高速道路を40分、さらに、舗装されていないために車が通るたびに土煙で道はおろか50m先すらも見えなくなるような果てしない道路を走り続けて、約1時間かかります。そこに住む人々は交通手段がまったくないため、最も近い保健所に行くためにも、最寄りのバス停までそのような道路を1時間以上かけて歩かなければなりません。水道・電話・ラジオすらなく、事故や病人が発生しても、治療を受けるまでの間に応急処置を施す手段もなければ、訓練を受けた救命士もいませんでした。

しかし今は、山を登って頂上に着くとすぐの場所に教会があり、その隣に外交官配偶者慈善の会(ABCD)が建てた、新しい、<sup>まばゆ</sup>眩いばかりの小さな診療所があります。ABCDの会員が、建材を寄付してくださる人やそれらを山の上まで輸送してくれる車を探すために数ヵ月もの間苦戦し、同時にテナシンゴの住民が自分たちで組織を作り、この小さな診療所を建てました。この建物は悪天候の中、洪水やぬかるみ、特に大雨で出来る泥道といった悪条件を乗り越えて、なんとか完成することができました。

この小さな診療所建設のため、前述のような努力をしている間、私は、ABCD委員会に、ある提案をしました。

事故が起きた時、負傷者が専門的な治療を受



エル・サルバドル

WORLD NAVIGATORから

ベネズエラから日本に留学し、日本人男性と結婚。現在、夫の赴任先であるエル・サルバドルに滞在中。

けたり、また、その場所まで搬送してくれる人が見つかるまでの間、生命を維持しつつ安定した状態を保ったりすることができるように、テナシンゴ地区のあるグループを応急手当班として養成することが重要ではないか、という提案です。エル・サルバドル赤十字の応急手当養成所、所長に協力を依頼したところ、快く受け入れてくださり、彼自身がテナシンゴ地区の保健ボランティアグループを教育してくださることになりました。2004年の9月から月に一度、土曜日にABCDの会長、赤十字の応急手当養成所長と私が、コフテペケ(電気がある町の意)で授業をするために集まることになりました。15歳から70歳の30名のボランティアが、強い関心と動機に突き動かされて、約1時間かけて舗装されていない道をバス停まで歩き、そこから更にバスに乗って授業を受けるためにコフテペケの教会まで行くのです。

3月には、最終回養成講座が行われました。保健ボランティア参加者は、全員が、赤十字の養成講座修了書と救急箱を1個ずつ受け取りました。そしてもうひとつ、応急手当の手助けとなる手引書も受け取る予定です。ボランティアの中には文盲の人も少なくないため、文字による説明書きに加えて、養成講座中に撮った実地の写真等を掲載した手引書の作成を赤十字の応急手当担当者と私が取り組んでいます。

テナシンゴ地区の保健ボランティアたちは、週末の土曜日、講座に参加するために家族を家に残して日々努力をしていました。そんな姿こそが、私たちに、「最善の講座を提供したい」という動機を与えてくれたのです。

この件は、自らの努力を惜しんで政府や組織に問題解決を期待するだけではない、今後見習って行動していくべき良い手本を、多くの人たちに示しているのではないのでしょうか。

(細野みどり 訳)